

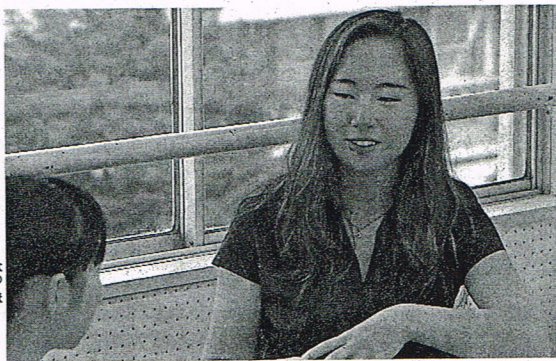
部活OG「やればできる」学んだ

いま No.957
子どもたちは
英語ディベート 中

7月の放課後、茨城県立竹園高校。ディベートチームの部員たちは、約30人ある英語の文書を持ち寄り、議論をしていた。表紙には「The U.S.-Japan

Alliance」の文字。米国会図書館の議会調査局が公表している「日米同盟」についてのレポートだ。
「日米同盟をどう説明するか」。顧問のパクストン・アンソニー国際科講師(39)が問うと、部員は数人の班に分かれて討論。「議論を止めないで。ゴー!」。先生の指示が飛ぶ。
練習は厳しい。ほとんど英語。米政府文書、英BBC、米

と、2年で主将の小玉夏帆さん(16)は感謝する。



後輩に助言をする羽鳥静華さん(右)
|| 茨城県つくば市

部員たちが「神的な存在」と慕うのが、OGの羽鳥静華さん(20)だ。英語を本格的に学び始めたのは中学からで、高1の時は討論の内容を理解するのに苦労した。だが、2年の時に出場した「全国高校生英語ディベート大会」で竹園を3位に導き、最優秀のベストディベーターに選ばれた。奨学金を取得し、米国のリベラルアーツカレッジ(教養大学)の名門ウェズリアン大学に進学した。

羽鳥さんは「英語ディベートをやっていたら、いまの進路はない。『やればできる』ことを学んだ」と話す。

7月上旬、一時帰国中の羽鳥さんが練習に参加した。「こっちはどう思う?」。後輩のテブルを回り、問いかけていく。2年の諸岡彩さん(16)は「先輩を見て、海外の大学に進学する選択肢があることにも気付いた」という。練習の終盤、小玉さんは部員を代表して宣言した。「これからも、まずは先輩に近づけるよう頑張ります!」(伊東和貴)